

# ライプニッツの自然哲学

——生物学的方法論的原理と生物種の問題——

寺嶋 雅彦

はじめに

本論の目的は、G・W・ライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716) の自然哲学のうち、生物に関する思想 (以下、「生物学」と表記) を方法論的原理、生物分類学、発生学という3つの観点から再構成することである。生物分類学及び発生学とでなされる主張を整合的に解釈する際には、「種の同一性と変化」をめぐる問題が生じる。本論ではこの問題を整合的に解釈することにも取り組みつつ、その展望を提示する。この問題は、これまでほとんど取り上げられてこなかったライプニッツ思想の一面である。しかし、彼の根本的な形而上学的主張である最善世界論と接点を見出すことができ、また、生物学史上の転換点である進化論思想との接点も見出すことができるため、この問題を取り上げることによって新たな視点からライプニッツの実像に迫る可能性があると言えるだろう。以下では、本論が明らかにした成果を章ごとに提示していく。

## 第一章 「生物学的方法論的原理」

第一章では、『新たな説』(Système nouveau de la nature et de la communication des substances)、『生命の原理』(Considérations sur les

principes de vie et les natures plastiques) など後期の著作を考察の対象とし、後期ライプニッツ生物学における方法論的原理を再構成した。ここでいう方法論的原理とは、ライプニッツが生物の仕組みを説明しようと試みる時に用いる基礎的な概念を指す。

同章では、以下の二点を明らかにした。第一に、「予定調和」と「力」という方法論的原理は生物において魂と身体とを厳密に結びつけつつ、魂と身体がそれぞれが独自に展開してゆくことを可能にするという点である。とりわけ『新たな説』では魂における情念の働きとそれに対応する身体における動物精気の運動などが記される。この場合、「原始的力」の制限によって、情念と動物精気の運動とが生じることを提示した。

第二に、「自然の事物に関する大原理」は「斉一性の原理」とも言い換えられ、予定調和と密接に関わりつつ、予定調和とは別の方面から神の介入を減らす道をサポートする点である。この、神の介入を減らす道はとりわけ本論第3章で考察する発生学で用いられていることを指摘した。

## 第二章 「生物分類学」

第二章では、生物分類に関して集中的に言及している『人間知性新論』(Nouveaux essais sur l'entendement humain) 第三巻を読解の中心的な対象とし、「種」の存在性格及びその定義の仕方という理論的側面と、それらの具体例という実践的側面から整理して、ライプニッツの生物分類学を包括的に再構成した。以下では、紙幅の都合上、理論面に関して明らかにしたことを提示する。

ライプニッツは、「人間という種に関しては、名目的定義とともに、実在的定義を持っている」と考えている。というのも、ライプニッツによると、「我々人間に共通の内的本性は理性である、ということが十分知られ

ている」ため、内的本性という指標を用いて定義することができ、実在的定義も有し得るからである。しかし、内的本性は可能的に有していればよいので、内的本性である理性は現実に現れてこない場合があり得る。ライプニッツが挙げる例では、愚か者や子供である。彼らは理性を有しているが、現に發揮しているわけではない。その場合、ある個体が人間という種に含まれるかどうか判定する場合には、実在的定義だけでは判定の原理として境界的事例を処理できない。したがって、外的特徴や発生などの名目的定義も用いて総合的に判断する必要があるということになる。

他方、「人間」という種を除けば、我々は生物種に関して、名目的定義しか有していないことになる。というのも、我々は人間以外の他の動植物が有する本質を見出す洞察力 (penetration) を持っていないので、それを認識できないからである。つまり、内的本性をとる指標を用いることができない、ということである。それゆえ、我々は外的特徴や発生などの暫定的な指標に頼りながら生物種を定義することになるため、「自然科学的種について私たちの持つ規定は暫定的なものであり、私たちの知識に比例する」ということになる。つまり、実践的には、いくつかの指標を用いて名目的定義を作り、自然観察によって得られる知識を増大させることで、その名目的定義はその蓋然性を高めていくことが可能になる。

### 第三章 「発生学」

第三章では、発生学に関して集中的に言及している『弁神論』(Essais de theodicee)、『デ・ボス宛書簡』(Lettre à P. des Bosses)などの後期著作を読解の中心的な対象とし、何が発生するのかという対象の側面と、その対象がどのように変化するかという変化の仕方の側面から発生学を再構成した。

対象に関しては以下のことを明らかにした。ライプニッツが発生学の対象にするのは、「種子」(semence)及び「精子的動物」(animal spermaticque)である。種子と精子的動物とはそれぞれ共通点を持ちながらも、異なる特徴を有する。種子と精子的動物の共通点は、種子も、精子的動物もそのうちに有機的体だけではなく魂も含んでいるという点、つまり基本的な構成要素が同じであるという点である。種子と精子的動物の相違点は、種子は本来、植物に対して用いられる語であり、それが拡張されて動物に用いられているのに対し、精子的動物は、文字どおり動物に限定されているという点である。例えば、『生命の原理』にまでさかのぼると、種子とは本来植物に関して使われる語であり、それが拡張されて動物に用いられているのがわかる。ライプニッツは『生命の原理』において、「むしろ今生きている動物は妊娠以前にも、植物におけるように (aussi bien que les plantes)、小さなものとして種子の内にあつたのではないかと考えられよう」と述べている。ここから、植物の種子をモデルとして、それを動物にまで拡張していることがうかがえる。

次に、変化の仕方に関しては以下のことを明らかにした。ライプニッツの発生学において、変化の仕方はふた通りある。一つ目は自然的な変化であり、神の介入なしに変化するということである。本論第一章では、ライプニッツが創造時以外の神の介入を避ける道を自然的な道と呼び、また、それを予定調和および自然の事物に関する大原理という二つの方法論的原理から支持していることを確認した。とりわけ、予定調和は、マルブランシュの機会原因論に対抗する目的で導入された概念であった。機会原因論に対して、神が創造後の世界に度々介入することを制限することを批判しており、予定調和では、神の介入が創造時だけとなる。つまり、被造物を創造する際にも、神は創造時のみ介入し、あとは自然的な仕組みだけで展開していくという考え方である。

二つ目は、超自然的な、あるいは奇跡による変化であり、神が介入することによって対象が変化するというものである。当時のカトリックの教義では、トマス主義を受け継ぎ、人間を創造する際には、神が完全性を引き上げるといった考え方があった。つまり、少なくとも人間が誕生する時には、神が介入し、奇跡を起こすという考え方である。

#### 第四章「種の同一性と差異」

第四章「種の同一性と変化」では、『モナドロジー』(Monadologie)を考察の中心的な対象にし、同著作で論じられる「種の同一性と変化」という本論第2、3章の考察によって得られた相反するテーゼに対して整合的な解釈を試みた。また、その解釈をもとに、ライブニッツと最善世界論、ライブニッツと進化論という二つの展望を示した。

同章では次の三点を明らかにした。第一に、発生と受精という類似した概念が生物種の同一性と同時に変化をもたらすという問題に対して、整合的な解釈をし得るという点である。その解釈を以下に示す。

発生は種の同一性を担保する、という場合に使う「発生」は可視的世界での出生、つまり、あるマクロな生物からあるマクロな生物が産まれるという意味であると解釈することができる。この場合、発生は種と種とを識別するための名目的な指標であって、種の同一性を確実に担保しているわけではない。つまり、現象レベルでの種に対する言説である。この種概念は、知識の増大によって改訂可能であるという意味で、経験科学的な種概念と言える。

他方、受精は種の変化をもたらす、という場合に使う「受精」はミクロな場面に目を向けた場合の出生であると解釈することができる。つまり、あるミクロな精子的動物々が、卵によって成長するという場面である。こ

の場合、マクロな動物々の精子的動物々は、そのうちに魂を含んでおり、受精後マクロな動物々と同じ種に変態すること、つまり精子的動物々の有する魂の本質が、マクロな動物々と同じ本質へと変容することが予先形成されていることになる。同様に、精子的動物々の有機的体身もマクロな動物々と類似した形態へと展開することが予先形成されている。ただし、少なくとも人間の場合には、受精の瞬間に人間の有機的体身の形をとる。受精によって変態し他の種の動物になるとは、上述のことを言う。

第二に、この現実的な世界すなわち最善世界はその完全性を変化させることがライブニッツの主張として知られているが、本論が明らかにした種の変化に伴う当該生物の完全性の変化という具体的な観点を持ち出すことによって、これまでの研究とは異なった観点から最善世界論を解釈し得るという点である。

第三に、ライブニッツが言及する種の変化に関して、それを進化論思想に位置付ける論者がいるが、本論が明らかにしたマクロなレベルでの発生では種は変化していないという観点をもち出すことによって、進化論思想として位置付けることには問題が残る点である。ただし、ライブニッツの記述には曖昧さが残り、進化論思想に全く与しえないとは断定できないことも示した。

#### おわりに

以上、本論の成果を部分的に提示した。これらの成果によって、ライブニッツ自然哲学における生物学の内実を示すとともに、彼の体系内において生物学が有する重要性を示し得たと言えるだろう。

# 無性―『存在と時間』における 自己伝承の根拠

野呂俊輔

はじめに

本稿はハイデガーの『存在と時間』における、「無性 (Nichtigkeit)」の問題を扱うものである。無性という言葉で表現されているのは、人間の生に必然的にそなわっているさまざまな「ない」ということであり、言うなればひとが生きるうえでの制限である。

『存在と時間』においてこの無性は、現存在が自己固有のありようをすすめるうえでの根拠となるものである。いわば自身の存在を自身で根拠づけることができないということが、現存在にとつての根拠となりうるという、特異な根拠づけのありようがそこで主張されている。この現存在に特有の根拠づけの内実を考察することが、本稿の主題である。

## 序論 存在の意味への問いにおける本来性の位置づけ

ここでは「存在の意味への問い」において本来性 (Eigentlichkeit) が有する機能について確認する。存在了解の徹底化として展開される実存論的分析論において本来性は、その対象となる現存在の根源的なありようを示すとともに、実存論的分析論そのものにとつての理念として機能している。これにもとづいて、本来性は自己批判機能をもつことになる。この機

能は、非本来性の動向に対抗するための概念装置としてはたらく。つまり本来性という概念は、存在の意味への問いにおいてその道標を示す機能が重視され、いっぽう生の必然的動向として非本来性の有する積極的な諸相は背景に退くことになる。

非本来性の積極的な諸相を浮かび上がらせるために、本稿では「既成解釈 (Ausgeliehnheit)」という問題を扱う。既成解釈は通常、無批判的に我々がそれに従っている「世間の声」といった側面を持ちながら、現存在がそこから自己固有の可能性を取り出してくるところの、「遺産 (Erbe)」としても現れる。この既成解釈の二面性から、現存在の日常を規定する非本来性の積極的な側面を見て取ることが、本稿の最終的な目標となる。

## 第一章 既成解釈の存立構造

ここでは、既成解釈の構造的な成りたちについて考察する。まずは、既成解釈において中心的な機能を担っている「解釈 (Auslegung)」のはたらきを、了解作用との関係から確認する。主題となるのは、了解作用における先行構造 (Vor-Struktur) と「ととして」構造 (Als-Struktur) との関係である。了解されたものを「ととして」構造のうちで分節化する解釈のはたらきは、了解作用においてすでに、内世界的な存在者を出会わせる地平を構成する先行構造において、おおまかに分節化されていたものの明確化である、というのがここでの主旨である。

つぎに既成解釈の公共的な性格について明らかにするため、解釈と語り (Rede) の関係について考察する。語りは解釈に先立つ分節化作用であり、いわば分節化の下描きを了解作用に与えるようなものとして位置づけられる。この語りの下描きをあたえる作用に、語りのもうひとつの側面としての、共有化の機能も関わっている。他者ともにあるという現存在の構造

において、語りの分節化機能は、存在者とともに近づきうるようにする機能を持つことになる。

さらに、語りにおいて分節化されたものが、言語として一定の客体性を備えたかたちをとることによって、その分節化されたものはもとのコンテンツから切り離され、平板化される傾向をもつことになる。このような言語による可能性の平板化ということが、既成解釈の動向において本質構成的なものとしてはたらいっている。

## 第二章 気遣いの三契機をつらぬく無性

（一）では気遣い（Sorge）の三つの契機について、それぞれ規定されている無性の意味を明らかにしたうえで、「無性の根拠であること（Grundsein einer Nichtigkeit）」という規定の内実について考察する。

第一に、「頹落（Vertiefen）の無性について考察する。まず、内世界的存在者の側から存在了解を規定されるという頹落の動向により、現存在の可能性としての性格は見過ごされ、現存在の存在はその客体的な属性という観点から捉えられることになる。さらに、世間的自己のもつ平均性への傾向によって、あらゆる可能性が平坦化されていく。本稿では世間の平均性への傾向を、現存在の言語的体制にもとづく共通地盤への傾向として捉え、その共通地盤から、さまざまな可能性が比較可能なかたちで扱われ、コンテキストを脱色される動向を示す。

これらの動向から、現存在の諸可能性を客体的に捉え、在庫として価値づけ操作するような世間のありかたが生じる。頹落の無性とは、このような世間の動向から現存在が切り離されることはできないということを示している。

第二に、投企（Entwurf）の無性を、被投的投企の無性と、投企そのもの

の無性とに区分する。まず被投的投企の無性は、可能性の投企そのものが、そのつどの状況や社会的文脈と相關的にあらざるをえない、ということに関わる。つぎに投企そのものの無性は、一つの可能性を選ぶことで、他の可能性を逸してしまふ、ということを意味する。これらを総合的に捉えると、次のようになる。すなわち、現存在が可能性として存在するうえで、その可能性はさまざまに制限されており、しかもその構造上、他の可能性はつねに無化されてしまっている。別様にはありえないというかたちで、取り返しのつかないしかたで、現存在は自身の可能性を投企している。

最後に被投性（Geworfenheit）の無性である。被投性は、自分で自分の存在を開始したわけでもないのに、ともかく存在しており、その自身の存在に関わらなければならぬ、という事実を示す言葉である。すでに存在してしまっていて、存在しないわけにはいかない、という「どうしようもなさ」が、「根拠であること」の本質をなしている。

さらに「根拠であること」は、被投性と投企がそのうちで複雑に絡み合っている規定である。つまり、自己関係性をもつ現存在は、自身の存在に関わらざるをえないような存在者として、自身があるということへと引き渡されており、このことによって現存在は、その引き渡されたものを自身の可能性として、自身の根拠とすべくそこへと向かうことができる。それをふまえれば、「無性の根拠であること」は、この「根拠であること」としての被投的投企の無的な性格によって、現存在が「そのようにしかない」というしかたで存在せざるをえない、ということの意味していると解釈できる。

## 第三章 伝承作用と現存在の共同性

「そのようにしかない」というしかたで根拠として存在することが、現

存在の本来性の内実をなし、さらに現存在に特有な恒常性の下地をなすものである。この恒常性は、現存在の歴史的なありようとしての、「伸びひろがり (Erstrecken)」という動性において見て取られる。それは「無性の根拠であること」にもとづく伸びひろがりであり、この動性において、既成解釈から遺産への変容も見て取ることができる。

「無性の根拠であること」にもとづく自己の伸びひろがり、自己の無性を契機とした固有のコンテキストにもとづいて、かつてあったものや今置かれている状況が必然的な相貌において出会われてくるようなありようである。つまり既成解釈が遺産へと変容するのは、そのようにしかありえないコンテキストのなか、可能性の連関が一義的に開示されることによると考えることができる。

つぎに、現存在の動性における「伝承作用」という側面から、可能性の取り戻しという問題について考察していく。ここでは、「可能性の自己伝承」という表現について、その「可能性が自身を伝えわたす」という側面に着目して解釈を行う。このように捉えることで力点は、可能性を与え返されるものと、可能性を与え返すものとのあいだの中動相的な作用に置かれる。ここではこの中動相的な作用を、「無性の根拠であること」にもとづく共同可能性の伸びひろがりという動性として考察していく。

この共同可能性の伸びひろがり、現存在の無性にもとづき、様々に制限され、他の可能性を無化しつつ、それ自身可能性としての性格を脱色される危険に晒されながら伸びひろがっていく。さまざまな可能性のうちには、投企や被投性、頽落の契機において、必然的に抜け落ちてしまうものがある。たとえば、可能性として潜在的に開示されるが、制約によって可能性とならなかったものや、平板化の動向のうちで、可能性としての性格を失ったものがそれである。

後者については、無的な根拠としての現存在が、一義的な可能性の連関

のもとで平板化されていた可能性と新たに出会われる、ということがありうる。いっぽう前者の可能性がいかに取り戻されるか、ということについて本稿では、現存在の伸びひろがりという動性にもとづいた修正可能性について考察する。相互存在のささいなふるまいの次元において、応答や撤回という動向がはたらくことで、「かつてありえたもの」が取り戻される、ということ本章の結論とする。

## 結 論

本稿の最終的な結論部では、共同可能性の伸びひろがりの動きのうちで、既成解釈の積極的な面を提示することを試みる。既成解釈の動向において、応答や取り戻しの動きによって、既成解釈はいわば注釈を無数に加えられる相貌を変えていく。この変容が、さしあたり共同可能性の伸びひろがりとして、偶然的な、取るに足らない流行の変遷といったかたちで出会われてくる。

しかし無数の注釈による変容のなかで、その変容のゆえにその瞬間にしかありえない可能性が閃いてくることがある。無数の注釈は、そのつど偶然であるかに見える布置状況をかたちづくっており、既成解釈はこれをかたどることに寄与するものである。そのかたどりによって、現存在が「そのようにしかない」というしかたで自身の状況に対峙するかぎり、注釈をくわえられ平板化した可能性は、唯一のなかたちにおいて出会われうる、というのが本稿の結論である。